

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 31 日現在

機関番号：33604

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2015～2016

課題番号：15H06709

研究課題名(和文)農村地域に生きる若者の「暮らしの再構築」と地域学習

研究課題名(英文)Community learning and "Re-structuring of life relationships" of youth in a rural area

研究代表者

向井 健(MUKAI, Ken)

松本大学・総合経営学部・講師

研究者番号：50756765

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、戦後農村青年学習運動の展開過程の解明と、それらの学習運動の現代的継承の可能性についての検討であった。本研究を通して、下記の事柄が明らかになった。

1) 農村の地域づくりを担う主体像についてである。地域づくりへの参加を通して生活課題の当事者になりゆく矛盾を抱えた主体として捉え直すことが重要であった。

2) 戦後の農村青年運動を主導した玉井袈裟男の提唱された「風土」の概念は、コミュニティの断片化が進む農村地域の「暮らしの関係性の再構築」において重要なキー概念となりうる。本研究を通して、地域固有の風土を活かした若者主体の地域づくりを組織化していく可能性についても実証的に研究することが出来た。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research was to clarify the history of rural youths' learning movement after the WW and to organize inherited community learning practice by contemporary rural youth. Especially, I researched for development process of community learning movement by the Rural Culture Association Japan and subsequent community development practice. What I have found are the followings:

1) In order to promote regional development, it is important that ordinary youth living in the rural community become encouraged through participation in community development.

2) In order to overcome the problem of fragmentation of the rural community, It is important to make perspective of "FU-DO" advocated by Kesao TAMAI (leader of community learning movement). "FU-DO" is characteristics of community defined by historical, social and natural factors. By activating these factors, it will be promoted the cooperation between rural community residents.

研究分野：社会科学

キーワード：農村青年 地域学習 暮らしの再構築 玉井袈裟男 風土論 断片化 協同

## 1. 研究開始当初の背景

現在の農山村地域は、若者の都市部への人口流出がとまらず、多くの集落が機能維持において危機にあることが指摘されている。地域コミュニティの内部の階層分化と格差化が進展する農山村の状況を鑑みれば、地域における主体形成の前提自体が切り崩されている状況が生まれているといえるだろう。このような農山村地域の現実を如何にして組み替えていくことが出来るのだろうか。

このような問題意識から、農山村地域の持続可能性を拓いていくために、次世代を担う若者たちが地域の中で生きがいを持ちながら生活・労働をしていく見通しを持つことのできる社会的条件を、創りあげていくことができるかが問われているのではないかと考えてきた。

しかしながら、現在の農山村地域においては、今まで以上に階層分化と格差化が進行している。そのような状況を鑑みれば、地域で生きる主体としての力量形成の前提自体が切り崩されている状況が生まれているといえる。そのような農山村の地域内の分断を越えた協同的關係を地域の中に再構築していくための学びの論理は、十分に解明されていない。

そこで本研究では、農山村地域に存在する実践コミュニティ同士の關係を持続可能なものへと編みなおす若者たちの「暮らしの再構築」を支える現代地域学習論の構築に関する基礎的研究を行っていきたいと考える。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、農山村地域に存在する実践コミュニティ同士の關係を持続可能なものへと編みなおす若者たちの「暮らしの再構築」を支える現代地域学習論の構築を試みようとするものである。

特に、本研究においては、信州における農山村部出身の若者を対象とした聞き取り調査を基に農村青年のライフコース選択とその要因分析を行うこと、信州農村青年の学習運動の歴史を辿りながら、それを戦後社会教育実践史の中に位置づけ、青年期教育の観点から地域学習論に対して新たな問題提起を試みること、農村青年らが「実践コミュニティへの参加しゆく過程」に着目することを通して、「個」と「地域社会」とが相互に関連し合いながら共時的に変容していく動態を射程に入れた学習論を構築すること、そして、それらの研究によって、実践と研究とを高次に統一しうる研究方法の提起をすることで、上記に掲げた本研究の目的を達成していきたいと考えている。

## 3. 研究の方法

具体的には、下記の諸点について取り組むこととする。

(1)農村青年のライフコース選択とその要因の解明

第1の課題は、長野県内の農山村出身の若者を対象として、ライフコース選択の要因について明らかにしていくことである。わたしたちが暮らしを営んでいくためには、地域における諸資源(職場や地域など)を活用しながら、自らの労働や生活の総体を組み立てていると把握することができる。そうならば農山村の生活の困難は、能動的に生活の総体を組み立てることの困難さの現われとしてみることができる。若者たちが自らの暮らしを能動的に構築していくことを阻害する社会的要因とは何なのか。長野県の農山村地域出身の若者たちを対象としたライフヒストリー調査を通して明らかにしていく。

(2)農村青年学習運動の展開過程の解明

第2の課題は、農山村における「暮らしの再構築」に資する地域学習の展開過程を、長野県を中心として展開した農村青年学習運動に即しながら実証的に明らかにしていくことである。1950年代以降、農文協長野県支部の農村青年らを中心に展開した学習運動は、農山村の困難な現実を切り拓く新しい地域の担い手(「農村実力派」)を育み、その後、全国に展開する生産大学や地域住民大学運動、地域の風土を活かしたむらづくり運動(風土舎など)へと発展する農山村の地域づくり運動の源流(小林 2013)としてみることが出来る。ここ近年、小田切(2014)の指摘に見られるように、現代の農山村において「そこに住み続けることの意味や誇りを見失う『誇りの空洞化』が深刻化をしている」状況を鑑みるならば、農山村の青年たちが学習を介して、自分たちを支配してきた「暗い感情」(玉井 1995)を乗り越え、地域の風土に根ざした仕事おこしに取り組んできたのか。そうした農村青年学習運動の展開過程と到達点を明らかにすることを試みる。

(3)新たな生活・労働を創出する「地域づくり実践検討会」の実施

第3の課題としては、農山村地域において、若者たちが生きられる新たな生活・労働のあり方を模索していくために、実践の中で抱えた「矛盾」を素材として、互いの実践を省察し合う「地域づくり実践検討会」を開催することである。地域の限界の中にあると規定していたものの見方を、異なる状況や立場に立つ他者のそれとつき合わせ、自らの認識枠組みを脱構築しあう地域学習を実践的に組織していくことを目指すものである。

## 4. 研究成果

本研究を通して得られた成果は、以下の諸点である。

(1)農村青年のライフコースの選択においては、その地域で生活・労働をしていくことの

出来るイメージの不足によって、地域から離れざるを得ないと判断しているケースが多いことが分かった。しかしながら、その一方で、従来の会社から雇用されるだけでなく多様な働き方・生き方や、複数の収入を組み合わせながら生活を成り立たせる暮らし方などが思い描けた時には、農山村で生きるという選択肢も浮かび上がってくるということがわかった。

(2)そのような新しい生き方・働き方を能動的に探求した試みとして農村青年学習運動は位置づけられると思われる。そのような楽手運動に参加した青年たちも、生活の中での矛盾を抱えた主体としてあった。しかし、その暮らしの中の「矛盾」は、新たな質の実践を産み出していく諸契機となることが広く理解されていたように思われる。玉井袈裟男氏の「暗い感情」論をみても、暮らしの矛盾を発達の契機として捉えていたことが分かるだろう。

(3)こうした農村青年学習運動は、長野県内の自治的な地域づくり運動や全国各地の地域資源を活かした地域づくり運動において広がりを見せていた。また生活に困難を抱える当事者の地域における「暮らしの再構築」（例えば、障がい者・高齢者の地域生活支援実践など）においても援用されていることがわかった。

(4)現代における農村地域における「分断」に抗しつつ、地域の協同を編み直していくためには、戦後の農村青年学習運動を主導した玉井氏らの提唱する「風土」を活かした地域づくりの視点を再評価することが重要であった。そもそも地域は「自然・文化により歴史性を内在させた空間」に他ならないが、玉井の「風土」という視点からは、そのような地域的な規定性を捉え返し、地域固有の生産・生活の営為を創造していくための知恵を見出すことができるだろう。そのような「風土」を活かす知恵を学びあう地域学習は、分断化されたコミュニティの内部の<人と人、人と自然>との間の諸関係を編み直すための視点を見出すことが出来ることになった。

(5)都市部から移住してくる若者たちの中には「人間らしくまともな労働・生活 (decent work & life)」を希求して、農山村地域に移ってきた人たちも少なくない。そのような若者たちが自らのニーズを省察し、新たな地域づくりの当事者になりゆく地域学習の場が保障されていることが重要であった。

(6)農村地域で暮らす若者の主体化を支えていく仕掛けとして、松本市内の地域づくり協議会や各地区に配置されている「地域づくりインターン」(松本大学と松本市の連携によ

る事業。地域づくりに関心を持つ松本大学卒業生を対象として、3年間、松本市の各地区にある地域づくりセンターに配置し、地域づくり実践を行う独自事業)から協力を得ながら、松本市四賀地区において2回ほど“地域づくり実践検討会”を開催した。そこでは新住民の若者世代と旧住民との対話を重視し、双方の相互交渉の機会を作り出すことを通して学びあいの場づくりをすることができ、新しい農山村の地域の暮らしの可能性を拓く地域学習を組織化することが出来たのではないかと考えている。

(7)若者たちの地域づくり活動の展開は、若者たちの間のみとの関係にとどまらず、地域において波及効果をもたらしていくことができた。若者たちの新たな地域づくりの試みに影響を受けながら、もともとその地域に住んでいた住民たちの主体的な地域づくり活動へと展開している事例も見られることになった。(例えば、松本市入山辺地区(農山村部)と松本市中央地区(都市部)の交流による野菜市などが代表例である。)

(8)このように農村に生きる若者たちが自らの地域を支える主権者意識を我が物にできるようになるためには、地域の抱える諸矛盾の解決を図る地域づくりの活動への参加が十全に保障されていることが重要であり、そのような実践を通して、「自らの暮らしをより良きものへと変えることができる」という実感をもつことのできる学びの場を保障することが重要である。また地域づくりを通じた実践的探求を支える「地域に根ざした大学」として松本大学において取り組んできた地域連携活動からの問題提起をすることができた。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計7件)

・向井健「当事者の参加と新たな公共圏域の再構成」『J-CEF NEWS (8)』日本シチズンシップ教育フォーラム、2015年、10-11頁。

・向井健「人が育つ地域」を創り合う学習と実践を豊かにしていくために」『信州の自然に生きそして学ぶ 2015』長野県公民館運営協議会、2015年、181-183頁

・向井健「困難を抱えた若者のエンパワーメントと場の文化規範の転換」『勤医協札幌看護専門学校紀要第5巻』勤医協札幌看護専門学校、2015年、7-15頁。

・向井健「地域の暮らしを拓く学びを創る」『社会教育・生涯学習研究所年報第11巻』社会教育・生涯学習研究所、2016年、129-140頁。

・向井健「若者の育ちを支える地域の協同」

長野の子ども白書編集委員会編『2016 長野の子ども白書』(株)キャロット、2016 年、14 - 15 頁。

・向井健「多声的な公共圏の再構成へ」『社会教育・生涯学習研究所年報第 12 巻』社会教育・生涯学習研究所、2017 年、31 - 51 頁。

・向井健「若者が育つ地域をともに創りあう松本大学における「地域連携」の試み」『人間と教育(93)』旬報社、2017 年 3 月、118 - 123 頁。

〔学会発表〕(計 2 件)

・向井健「生活実践を切り拓く島田実践に学ぶ」(社会教育・生涯学習研究所 2015 年度第 1 回自由研究会、社全協事務所)

・向井健「地域・公民館と連携した PBL 型授業」(日本社会教育学会 6 月集会、東海大学高輪キャンパス、2016 年 6 月 5 日)

## 6 . 研究組織

(1)研究代表者

向井 健 (MUKAI, Ken)

松本大学・総合経営学部・専任講師

研究者番号：50756765